

天大生のSDGsに関する意識調査④

おやさと研究所教授
佐藤 孝則 *Takanori Sato*

私は、春学期授業・「地球環境論」の期末テストの中で、「天理大学として『SDGs』を実践するには、どのような方法・内容が考えられるか？ 具体的な事例をあげて説明しなさい」という一つの設問を受講生に課した。これは、授業で講義した「SDGs」についてどこまで理解し、その理解をどのように応用させられるかを推し量る設問だった。また、学生による天理大学への期待、あるいは日々抱いている思案・試案・私案を窺い知る意識調査でもあった。

263名による複数回答の結果をみると、国連が定めた17「目標」に則った回答は504項目数、天理大学に特化した7“目標”に区分される回答は169項目数で、両者を合わせると673項目数だった。この総項目数を17「目標」（1～17）と7“目標”（A～G）に分けて示したのが下図である。

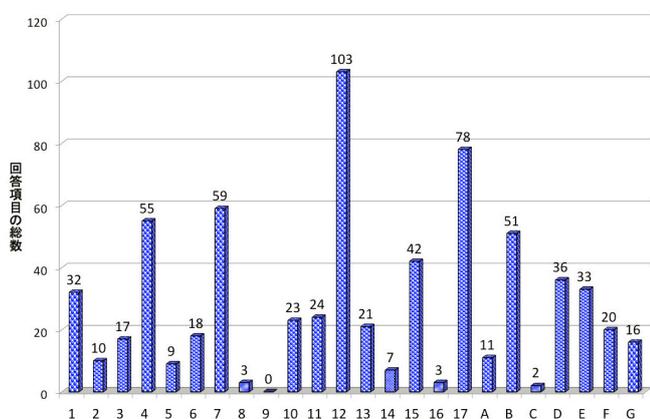


図. SDGsの17「目標」と天理大学に特化した7“目標”に回答した項目数。

ちなみに、図中の「目標」1は「貧困」、2は「飢餓」、3は「保健・福祉」、4は「教育」、5は「ジェンダー」、6は「水・衛生」、7は「エネルギー」、8は「経済・雇用」、9は「インフラ」、10は「不平等」、11は「持続可能な都市」、12は「生産・消費」、13は「気候変動」、14は「海洋資源」、15は「陸上資源」、16は「平和」、17は「協働・実施手段」を示す。また、“目標”Aは「建学の精神」、Bは「国際参加プロジェクト」、Cは「エコキャンパス宣言」、Dは「スポーツ宣言」、Eは「天理教教理との関連性」、Fは「農産物の地産地消」、Gは「子ども食堂・フードバンク」を示す。

上図から、回答項目総数が多かった上位8つを見ると、1番目は食品ロスやごみ問題に関する目標12「生産・消費」の103項目数で、2番目以降は、川清掃やごみ拾いなどの「エコ体験」等を促す目標17「協働・実施手段」の78項目数、そして節電や室温管理、太陽光・風力発電等の推進を促す目標7「エネルギー」の59項目数と続いた。

4番目以降は、「SDGs」の授業を必修科目にすべきの意見を含む目標4「教育」の55項目数、海外での「SDGs」活動を促す“目標”B「国際参加プロジェクト」の51項目数、学内で緑化や「緑のカーテン」づくり等を促す目標15「陸上資源」の42項目数、天理スピリットの体现を促す“目標”D「スポーツ宣言」の36項目数、そして8番目の天理教の教えに基づく「SDGs」の実践を促す“目標”E「天理教教理との関連性」の

33項目数と続いた。この8つの「目標」と“目標”で、回答項目数全体の67.9%を占めた。

以上の回答結果から、受講生が天理大学の「SDGs」の実践に期待することは、以下の内容であることが示唆された。

近年、食品ロス（食べられるにもかかわらず廃棄される食品）やプラスチックごみの問題は、グローバルな課題として国内外で頻りに議論されるようになってきた。日本では、毎年およそ640万トンの食品ロスが生まれる。その量は、国連が途上国へ援助する食料のおよそ2倍に相当する。これらのことを、講義の中で繰り返し学生たちに述べてきた。そのことが、「目標」12への回答に繋がったのではないかと考えている。もちろん、「目標」1、2、10、13、17や、“目標”Gとも関連する回答だったことも、十分に想定できた。

加えて、食品ロス問題（「目標」12）は、天理教の教えに基づく「菜の葉1枚でも粗末にしない」や「物は大切に」に通底していると考え（“目標”E）、ロスを少しでも減らしたい無くしたいとの思いが、「子ども食堂」や「フードバンク」への期待（“目標”G）として回答に現れたのではないかと考える。そして、そのことは「建学の精神」（“目標”A）とも関連することを、学生たちは承知していたと考えている。

また、学内の省エネや自然エネルギーの活用についても関心は高く、スポーツ器具使用時に発電可能な仕組みを導入してはどうかというユニークな提案（「目標」7）もあった。他にも、学生や教員による市民を対象にしたスポーツ教室（「目標」4）やスポーツを活かしたまちづくり（「目標」11）の提案もあった。これらはまさに「天理大学スポーツ宣言」（“目標”D）に則った回答だった。

一方、国際性を重視する「国際参加プロジェクト」への期待（“目標”B）も高く、さらに学内の更なる緑化促進（「目標」15）を促す提案も多かった。「天理大学エコキャンパス宣言」への期待（“目標”C）も、わずかだが認められた。

以上、今回実施した「SDGs」に関する調査結果は、天理大学生の期待が十分に反映されたものとする。しかも、今日的で、天理大学として実践可能な提案が多かった。

「SDGs」に関する新聞記事が毎週のように掲載されている今日、国内では「SDGs」が重要な戦略として紹介されている。特に経済界では、「SDGs」を考慮しない企業経営は、市場にそっぽを向かれるとさえ言われている。今年の9月22日、国連は「責任銀行原則」を発足させ、日本を含む世界のメガバンクがこれに署名した。6項目のうちの最初の項目には、「SDGsとパリ協定が示すニーズや目標と経営戦略の整合性を取る」と書かれている。このように、日本の銀行でも「SDGs」は重要なキーワードとして評価されつつある。

また、来年の東京五輪・パラリンピックは、「SDGs」を踏まえた取り組みとして実施される。天理大学は、今年の11月1日、天理市とコカ・コーラボトラーズジャパンの3者で、このイベントを盛り上げるための協定書に署名した。

地域のスポーツ振興と市民の健康づくりで連携する活動は、まさに「SDGs」の実践そのものではないだろうか。